



先ほど養老先生が、父上の逝去に際して、さよならが言えなかった、父上との関係が切れてしまうのが怖かったからだったと、中年になって気が付いたというお話を致しました。

キリスト教の信仰において、死者とのかかわりはどうなっているのでしょうか。どのように信じているのでしょうか。本日の福音に耳を傾けてみましょう。

復活についての主イエスとサドカイ派の人々とのやりとりです。サドカイ派はユダヤの上流階級の祭司や信徒による集団で、権力、富、ローマ帝国とのつながりを重視する集団です。ファリサイ派とは仲が悪かった。復活と言うことを信じてはいなかった。主イエスのこともこころよく思っていなかった。

主イエスに滑稽なたとえを持ち出して、窮地に追い込みたいと近づいてきます。所謂レビラート婚です。「ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけなければならない。」

「ところで、7人の兄弟がいた。長男が妻を迎えたが子がないまま死んだ。次男、三男と次々にこの女を妻としたが、7人とも同じようにこどもを残さないで死んだ。最後に、この女も死んだ。すると復活の時、その女はだれの妻になるのか。」すると主イエスは、相手が当惑するような返答をされます。

次の世では、めとることも嫁ぐこともない。もっと自由な世界、新しい関係の中で生きることになる。天使に等しい人、復活に与る者、神の子とされる。モーセの柴の箇所とは、出エジプト記3章です。主はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。「私はある」と神さまが自己紹介をモーセにされる。神さまは過去・現在・未来生き続ける、存在し続ける方である。神さまは今も生き、働いておられる。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神だ。全ての人は神によって生きているからである」とお答えになります。アブラハムもイサクもヤコブも、神にあって生きている。神さまの御許に帰った死者は、神にあって生きているのです。そして、神を通して私たちと死者はつながっているのです。

ヨブ記19：25・26には、「わたしは知る。わたしを贖う者は生きておられる。後の日には、彼は必ず地の上に立たれる。わたしの皮がこのように滅ぼされた後、わたしは肉を離れて神を見るであろう。」とあります。逝去なさった方は、神様を見、神様の御手に抱かれておられるのです。そして、神さまのみもとで生き、わたしたちのために祈ってくださっているのです。

諸聖徒日、諸魂日、逝去者記念礼拝、墓前礼拝で憶える方々と私たちは神さまを通してつながっているのです。

ですから、私たちは、大切な方とのお別れは悲しく辛いのですが、離れ離れになったり、関係が切れてしまうことはありません。恐れることはないのです。神さまを通してつながっています。わたしたちは祈られて生きているのです。

父と子と聖霊の御名によって アーメン

<ウクライナの平和のための祈り>

正義と平和の神よ、

わたしたちは今日、ウクライナの人々のために祈ります。

またわたしたちは平和のために、そして武器が置かれますよう祈ります。

明日を恐れるすべての人々に、あなたの慰めの霊が寄り添ってくださいますように。平和や戦争を支配する力を持つ人々が、知恵と見識と思いやりによって、み旨に適う決断へと導かれますように。

そして何よりも、危険にさらされ、恐怖の中にいるあなたの大切な子どもたちを、あなたが抱き守ってくださいますように。

平和の君、主イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン。

<主の祈り>

主イエスが教えられたように祈りましょう。

天におられるわたしたちの父よ、

み名が聖とされますように。

み国が来ますように。

みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように。

わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。

わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします。

わたしたちを誘惑におちいらせず、

悪からお救いください。

国と力と栄光は、永遠にあなたのものです アーメン